

平成元年 1989年 創刊 No.434

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2026年6月号



杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 No. 167

杉本純（東京科学大学特任教授 元京都大学教授 元原子力機構ウィーン事務所長）

東京科学大学が代表校を務める大学連合の2026年度「海外インターンシップ研修」の東京科学大学内の合同面接審査が4月28日夕方、大岡山キャンパス北2号館の会議室で開催された。海外インターンシップ研修は、原子力規制庁からの受託である規制人材育成事業でも当学からIAEA(国際原子力機関)等へ2名の派遣枠があるため、大学連合と合同で面接審査を実施した。両事業で修士課程1年の学生3名の応募があった。

韓(ハン)特任准教授(規制人材育成事業担当および大学連合兼務)の司会により、面接審査の進め方を審査教員に対して説明の後、同准教授から各応募者へ応募動機・目的、目標・計画、期待する成果と成果の将来の研究・キャリアへの活かし方など、同一の質問を英語でして、各応募者から英語で回答してもらう。その後、各審査教員と応募者との間で質疑応答を行うことにより、応募者の技術的能力や熱意ばかりでなく、英語のコミュニケーション力も評価した。筆者も事務局として、学生にいくつか質問をした。厳正な審査の結果、規制人材育成では2名のIAEA派遣者を決定するとともに、大学連合では1名のIAEA派遣候補として第1次選抜者を決定した。して技術力とコミュニケーション力を確認した。

今後、各大学からのIAEA及びOECD/NEAそれぞれ最大1名を第1次選抜者に対して、第2次選抜として、5月下旬までに、大学連合選考委員会において審議して、IAEA派遣2名、OECD/NEA派遣1名の第2次選抜者を最終的に決定することになっている。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の6月の風物詩を紹介したい。ウィーンでは、郊外のホイリゲが初夏の賑わいを迎える。ホイリゲとは、新酒を供することを許されたワイン酒場のことで、ぶどう畑の広がるグリーンツィングなどには現在も百数十軒の店が点在し、人々が夕暮れの涼風の中でワインと郷土料理を楽しむ。起源は18世紀末、皇帝ヨーゼフ二世が自家製ワインの販売を認めたことに遡るとされ、市民生活に根差した社交文化として発展してきた。木陰のテラスに響く談笑や音楽には、ウィーンならではの穏やかな時間が流れている。

一方、京都では6月、鴨川納涼床が夏の訪れを告げる。鴨川西岸に張り出した床席では、川の流れと涼風を感じながら京料理を味わうことができる。現在、納涼床を構える料理店や茶屋は約80~90軒に及び、鴨川沿いに独特の景観を形づくっている。この風習は安土桃山時代に始まったとされ、江戸時代には現在の形へと整えられていった。夕暮れ時、川面を渡る風の中で食事を楽しむ光景は、京都の夏を象徴する風物詩となっている。格子越しの灯りや川のせせらぎには、自然と共生しながら暑気を和らげてきた古都の知恵と美意識が静かに息づいている。

ウィーンのホイリゲがワインと語りによって人々を結びつけるのに対し、京都の納涼床は川の涼感と繊細な料理によって季節を味わわせる。いずれも屋外で自然を感じながら過ごす初夏の文化であり、都市生活の中に豊かな余白を生み出している。両市はそれぞれ異なる風土の中で、人と自然と食を結びつける優雅な時間を育んできた。

余談であるが、ウィーン在住時にホイリゲは1年中楽しんだが、6月が特に爽やかである。京都の鴨川納涼床は学生時代には無縁だったが、教員時代には通勤でその下を鴨川沿いに四条河原町まで通うとともに、たまには涼風と料理を楽しんだ。今月も両市の6月の風物詩を紹介することができた幸運に感謝しつつ、筆者がウィーン滞在中に描いたホイリゲのスケッチを掲載させていただく。



「海外インターンシップ研修」合同面接審査の様子



ベートーヴェンが一時住んでいたというホイリゲ